

この十字軍事件をざっくり、だけど頭に残る形で理解するためには、当時の歴史の背景を知ることが要になるんですね。そこで、十字軍とユダヤ人については前編と後編 2 回に分けてお話しします。前編では“十字軍に至った歴史的バックグラウンド”をご紹介します。

当時の歴史的背景を理解するには、2 つの国と 1 人の人物に注目すると分かりやすいと思います。2 つの国とは**イスラム帝国**と**東ローマ帝国**。

1 人の人物とはローマカトリックのトップである**ローマ教皇ウルバヌス 2 世**。

この 3 つのポイントで歴史を頭に放り込んでおくと、後半の話がスッと入るんじゃないかと思うので、ちょっと遠回りしてるみたいですが、背景を述べさせてください。

①イスラム帝国

イスラム教はムハンマドが始めました。彼が亡くなった時の問題は、誰を後継者にするのかということでした。彼には息子がいたのですが、幼い時に亡くなってます。ファティマという娘がいるのですがまだ幼い。荒くれ集団のアラビア半島をようやくまとめた時に、足元を見られてはならない

後継者・代理人を意味するアラビア語は“カリフ”です。ムハンマドのカリフ（代理人）を奥さんのお父さんに据えました。1 人目のカリフはアブー・バクル（在位 632-634）。

2 代目のカリフは、別の奥さんのお父さんのウマル（在位 634-644）にやってもらうんですね。

このウマルがやり手なんです。メッチャやり手。この人の時代に、イスラム帝国がアラビア半島から、一気にですよ、一気に拡大してササン朝ペルシアを滅ぼし、まさに進撃の巨人イスラム版をやったんです。破竹の勢いでイスラム帝国が広がって行きます。ムハンマドが亡くなってわずか 9 年後に あの無敵のササン朝ペルシアが滅び、東ローマ帝国は 2/3 がイスラム帝国のものになってしまうんですね。

ところが、あまりにも短時間で一気に領土が増えたので、悩ましい問題が出て来たんです。一気に領土が増えると、それだけ国境線が長くなる。国境警備の軍隊がたくさん必要だということです。アラビア半島から連れて行った戦士だけではどうにもならない。しかも周りには、色んな いかつい国がたくさんある。

そこで、急速に拡大したイスラム帝国の安全保障を守るために、金で兵士を雇いました。

用心棒。傭兵ですよ。だれを雇ったのか？ 中央アジアの騎馬民族のトルコ民族を雇うんですね。

今でも中央アジアにはキルギスタン・トルクメニスタン・ウズベキスタン・カザフスタンなど、〇〇スタンという国が多いんですが、“スタン”はトルコ語で“国”の意味です。

日本人も中央アジアから来たんじゃないかと言われてますよね。

トルコの騎馬民族は戦争がめちゃくちゃ強いので傭兵として雇い、アラブ・イスラム帝国にどんどん入って行って、そして、トルコの傭兵に頼らないとやって行けなくなっちゃうんです。国の中にはトルコの傭兵がいっぱい、国の外にはトルコの軍団がいてるわけですね。

外側のトルコ軍団の中に、セルジューク族という部族がおったんです。勇猛果敢で、戦争めちゃくちゃ強い好戦的な部族。このセルジューク・トルコ族がアラブ・イスラム帝国に、繰り返し繰り返し 連続攻撃を仕掛けて来る。ジャブじゃない。ワンツーじゃない。ワンツースリーフォー、ダダダ！“北斗の拳かよ”と。

そして 11 世紀に、アラブ・イスラム帝国の首都バグダッドがセルジューク・トルコ軍に落ちてしまい、その瞬間に、イスラム帝国の盟主はアラブ民族からトルコ民族にチェンジしました。

中東一帯を支配するのは、アラブ人ではなくトルコ人になったんです。

トルコ語で王様を“スルタン”と言います。スルタンはカリフじゃない。カリフはムハンマドの代理人。トルコ人は非常に賢くて、政治的実権を握ってスルタンになる時、形式的なことなんですが、カリフから「おまえがスルタンになれ」と言ってもらうことで、カリフの立場も認めながらイスラム帝国を引き継いだので、うまーくまとめることが出来たんですね。

これがイスラム帝国の中で起こった変容です。イスラム帝国は、今まではアラブが主導権を握って大きくなったのですが、傭兵のセルジューク・トルコが乗っ取ったというか、まあ乗っ取ったんです。ここから先は、トルコ中心のイスラム帝国時代が、オスマン帝国時代の最後までずーっと続くんですね。これが1つ目の国。

②東ローマ帝国

ローマ帝国はあまりにも広くなりすぎたので、1人の皇帝が目配りするには守備範囲が広すぎる。なので、東西に分かれるんです。世界史の教科書の中に「東西ローマ帝国分裂」て。いや、分裂じゃないんですよ。当初、分裂じゃないんですよ。“西の守備範囲と東の守備範囲を分けましょ”ということで、東西のローマ帝国になるんです。

東ローマ帝国はちょっと特徴があるんですね。東ローマ帝国の皇帝が東ローマの宗教（ギリシア正教）の宗教的指導者を兼ねている。宗教的指導者と政治的指導者を兼任しているんです。

東ローマ帝国は西ローマ帝国と同じくらいデカかったんですが、イスラム帝国によって2/3取られてしまう。残った1/3はギリシア人が住んでいるエリアです。だから、西ローマの公用語はラテン語ですが、東ローマ帝国の公用語はギリシア語。ギリシア語文化圏しか自分の領地がないので、結局東ローマ帝国の皇帝は歴代ギリシア人ばかり。もうギリシア化していくわけです。西とは国の空気が全然違うんですね。

東ローマ帝国、別名ビザンチン。同じことです。東ローマ帝国の首都コンスタンチノーブルは、元々ビザンチウムなのでビザンチンと言うんですね。東ローマ言うてるけど、その領域の中にローマ市無いので、ビザンチンと言う人も多いんです。ここではどっちしようかな。東ローマと言っときましょか。

この東ローマ帝国が風前の灯火まで行くんです。何が問題か？セルジューク・トルコのイスラム帝国ですよ。セルジューク・トルコはアラブ・イスラム帝国を乗っ取るだけではもう満足しない。乗っ取った後で、次の獲物としてのターゲットを東ローマ帝国に定めたんです。アラブ・イスラム帝国の時も、東ローマは散々むしられているんですよ。セルジューク・トルコ時代になったらバージョンアップ。もっと強くなっている。セルジューク・トルコの攻撃をずっと受けて、このままなら滅亡というところまで行ったんです。これが東ローマ帝国。

③ローマ教皇ウルバヌス2世（1042-1099/在位1088-1099）

“国の滅亡はカウントダウンの状態だ”となった時、東ローマ皇帝はだれに助けを求めたらいいですか？元々一つの国だった西ローマ帝国に頼んだらいいじゃないか？西ローマ帝国はもっと早くに無くなってるんです。とっくの昔にゲルマン民族によって滅ぼされて、西ローマ帝国は無いんです。

西ローマ帝国があった領域にはゲルマン人があっちこっちに国を建てて、これらの国の上に権力者がいました。ローマ教皇ですよ。ローマ教皇は西ローマのキリスト教のトップ。ローマカトリックのトップです。

次回お話ししようと思いますが、ローマ帝国は392年にキリスト教を国教にしました。ローマ帝国に住んでいる人は、自動的に全員キリスト教になってるわけです。

そこにゲルマン民族が入って来た。ゲルマン民族は喧嘩が強いからあちこちに勝手に国を造るけど、人口比では少数派です。少数派が多数派を宥めて君臨するには、多数派が大切にしているものを大切にするのが良いのです。

多数派のローマ人たちはローマカトリックになっていたので、ローマカトリックのトップに頭下げましてね、「私をフランク王国の王様として認めてください。」 天皇と征夷大將軍の関係ですよ。さっきのカリフとスルタンの関係も一緒です。権力者は、権威者から権力を認めてもらうことで初めて、皆さんに認めてもらうことが出来る。その在り方ですよ。

西ローマ帝国という国は無いけど、西ローマ帝国の中にある色々な国の上にカトリック教会がいた。そのトップがウルバヌス 2 世でした。

東ローマ皇帝が西ヨーロッパの王様に「助けに来てくれ」言うてもあきませんねん。

自分たちの上にローマ教皇がいるんです。ローマ教皇に話しをつけない限り、そんななん何も動かすこと出来ない。そこで、東ローマ帝国皇帝 兼 ギリシア正教会トップである皇帝は、ウルバヌス 2 世に「助けに来てくれ」と（頭下げて）頼むんです。

しかし 1 つ問題があった。実はローマカトリック教会とギリシア正教会ってね、めっちゃくちゃ仲悪い。「えっ？おんなじキリスト教やのに仲悪いんか？」 皆さん、こんな言葉聞いたことありませんか？ “異端は異教よりも憎し” 同じ宗教の別の宗派の人は、全く違う宗教の人よりもっと憎い。

皆さんのビジネスの世界でもそういうことありませんか？ 餃子の世界にも京都王将と大阪王将。シュークリームでも洋菓子のヒロタとシュークリームのヒロタ。のれん分ける時に揉めに揉めて、ものすごく張り合ってるってありますよね。

人間は自分の価値観や自分なりに持っているルールで生きていますが、それが全く相容れない人は “コイツ、宇宙人や” ということで初めから度外視するので、自分のアイデンティティが影響を受けることはないんです。

ところが、自分の考え方とほぼ同じ考え方の人で、多少違う部分があるという場合、自分のアイデンティティがちょっと脅かされるんですね。それで、わずかな違いに対して敏感になって攻撃的になる。

ローマカトリックとギリシア正教、同じキリスト教で何が違うのか？

色々違いはありますが、最大の違いは “キリストの代理人はいったい誰か？” ということです。

ローマカトリックは「ローマ教皇こそがキリストの代理人だ！」

ギリシア正教は「ギリシア正教のトップが代理人だ！」

互いに譲らない。その結果、ローマ教会はギリシア正教を異端として破門。ギリシア正教はローマ教会を異端として除名。互いに「コイツは異端だ！」と対立し合って、それが何百年も繰り返されて来たんです。

それが、困ったからと言って「お宅が命令できる軍団を遣わして助けてください」、頼めますか？…

頼んだんですよ。背に腹は代えられないから頼んだということですが、頼まれたとき、皆さんならどうなされますか？ “フン！” ってほっといたら、これどうなりますかねえ。

自分の手を汚さずに、イスラームの手で宿敵を倒すことが出来るじゃありませんか？

その代わりに、東ローマ帝国の所にイスラーム帝国が乗り出して来るから、自分たちのすぐ隣、すぐご近所にイスラーム帝国が拡大侵入して来ることになる。つまり、次の餌食は自分だということになりかねない。

ウルバヌス 2 世は申し出を受けるのですが、彼の影響下にあった国々の人たちは「ギリシア正教なんかあかんのや。東ローマ帝国は異端なんや。あんなものはダメだ！ダメだ！」と。そんなダメな国のために、なんで 1 つしかない命を懸けるんですか？

次回、そこに注目したいのです。次回 2 つの点でこれを見たいと思います。あんなに毛嫌いしていた外国の安全保障のために、どうして西ヨーロッパの人たちは、戦争が強いセルジューク・トルコとの戦いに熱狂して参加して行ったのか。

彼らは十字軍という名称で戦争するのですが、十字軍がやった残虐行為は極悪です。最悪です。醜悪です。人類が犯して来た様々な醜い罪がありますが、その 1 つは教会がやっている。十字軍はその典型です。なぜキリストの教会が、人類史上 10 本の指に入るような残虐犯罪行為をしたのか。それを命じたのか。しかも 1 回だけでなく、7 回も 8 回も繰り返したのはなぜか。なぜキリスト教会が悪事に加担したのか。

キリスト教歴史の中で中々明らかにされていないこの部分について、次回つまびらかにしたいと考えております。ちょっと気が進まないんですけどね、その部分を見ておかないと、やはりこれから話しを進めることが出来ませんし、最近、「教会がこんな悪いことしたのをどう思ってるんだ！」みたいなコメントが多いので、それに対する回答にもなるのではないかと思います。よろしければ、またご覧ください。

ではまた次回の『ごうちゃんねる』まで、皆さん、お元気でいてください。さよなら!!

* 使用した聖書は『聖書 新改訳 2017』です。